

第1章 日本の原子力開発利用の社会史をどうみるか……………9

- 1 日本の原子力開発利用の国際的文脈についての予備知識 9
- 2 日本の原子力開発利用の構造的特質 17
- 3 日本の原子力開発利用の社会史の時代区分 28

第2章 戦時研究から禁止・休眠の時代（一九三九～五三）……………45

- 1 日本の原爆研究 45
- 2 連合国軍の原子力研究禁止政策 54
- 3 原子力研究の解禁と科学界の動き 63

第3章 制度化と試行錯誤の時代（一九五四～六五）……………69

- 1 原子力予算の出現 69
- 2 科学界の対応と原子力三原則の成立 74
- 3 原子力開発利用体制の整備へ向けて 80
- 4 二元的な推進体制の形成 86

第4章 テイクオフと諸問題噴出の時代（一九六六～七九）……………117

- 1 原子力発電事業のテイクオフ 117
- 2 動力炉・核燃料開発事業団（動燃）の発足 124
- 3 核燃料サイクル技術に関する必要最小限の解説 133
- 4 社会主義計画経済を彷彿させる原子力発電事業の拡大 143
- 5 反対世論の台頭とそれへの官庁・電力の対応 149
- 6 原子力共同体の内部対立激化と民営化の難題 162
- 7 核不拡散問題をめぐる国際摩擦 172

第5章 安定成長と民営化の時代（一九八〇～九四）……………179

- 1 軽水炉発電システムにおける「独立王国」の建国 179
- 2 対米自立政策の形成と屈折 187
- 3 商業用核燃料サイクル開発計画の始動 192
- 4 高速増殖炉およびその再処理に関する技術開発の展開 202

5	科学技術庁グループによる他の開発プロジェクトの展開	209
6	チェルノブイリ原発事故と脱原発世論の高揚	220
7	冷戦終結のインパクトと核不拡散問題の再浮上	229
8	国内における不協和音の高まり	234

第6章 事故・事件の続発と開発利用低迷の時代

(二)世紀末の曲がり角(一九九五～二〇〇〇)……………245

1	世紀転換期の原子力開発利用の見取図	245
2	高速増殖炉もんじゅ事故とそのインパクト	250
3	原子力行政改革の展開	255
4	中央政府と地方自治体との関係の見直し	263
5	分水嶺となった東海再処理工場の火災・爆発事故	268
6	核燃料サイクル政策の原状復帰へ向けて	272
7	高速増殖炉開発政策のささやかな軌道修正	279
8	JCOウラン加工工場臨界事故	287
9	商業原子力発電拡大のスローダウン	290
10	地球温暖化対策としての原子力発電	295
11	電力自由化論の台頭	302

第7章 事故・事件の続発と開発利用低迷の時代

(三)原子力立国への苦闘(二〇〇一～二〇一〇)……………307

1	中央行政再編と科学技術庁解体	307
2	ブルサーマル計画の大幅な遅れ	313
3	原子炉損傷隠蔽事件とそのインパクト	321
4	佐藤栄佐久福島県知事の反乱	325
5	電力自由化問題と六ヶ所再処理工場	330
6	原子力体制の再構築	338
7	柏崎刈羽原発の地震災害	345
8	核燃料サイクル開発の混迷	348
9	民主党政権時代の原子力政策	354

第8章 福島原発事故の衝撃……………363

1	福島原発事故の発生	363
2	福島原発事故の拡大	367
3	福島原発事故による放射能放出	370
4	福島原発事故の国民生活への影響	373

5	世界のどこでも起こりうるチェルノブイリ級事故	378
6	危機発生予防対策の不備	382
7	危機管理措置の失敗	385
8	東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会	390
9	歴史的分水嶺としての福島原発事故	393

あとがき
395

索引